

アメリカ独立戦争と18世紀末フランス・モード

西浦 麻美子

(お茶の水女子大学大学院人間文化研究科)

原稿受付平成18年6月23日；原稿受理平成18年11月4日

The American War of Independence and Fashion at the End of the Eighteenth Century in France

Mamiko NISHIURA

Doctral Research Course in Human Culture, Ochanomizu University, Bunkyo-ku, Tokyo 112-8610

The purpose of this article is to examine the influence of the American War of Independence (1775-1783) on French fashion, which was dominated by Anglomania during the latter half of the eighteenth century. The revolt of the Colonies against England brought to France the cult of America and enthusiasm for freedom. A series of big hairstyles for women named "à l'américaine" were created to celebrate the French victories and the arms of French heroes. When Benjamin Franklin visited Paris, the Parisians found in his simple, rustic costume the positive image of a republican who aspires to liberty. La Fayette and the soldiers who had campaigned in America momentarily became a model of fashion. But despite those popular fads, there was no new force that could displace Anglomania. Michel Pastoureau insists that the Revolution's stripe originated from the Colonies, but we must distinguish between the democratic stripe and the noble stripe. The influence of America was feeble and was assimilated into English fashion because their simple costume and image of liberty were common to the English.

(Received June 23, 2006; Accepted in revised form November 4, 2006)

Keywords: American War of Independence アメリカ独立戦争, hairstyle 髪型, Franklin フランクリン, La Fayette ラ・ファイエット, stripe 縞.

1. はじめに

18世紀末、アメリカの植民地が本国イギリスからの独立を目指して戦った戦争(1775-1783)は、フランス中を「自由」という熱狂の渦に巻き込んだ。フランスの軍人、貴族は競って、この「蜂起する人々 Insurgents」を支持し、隣国イギリスと海上戦、陸上戦を繰り広げることになる。この戦争とモードとの関わりを考えることが本論の目的である。

18世紀後半のフランスは、「イギリス心酔 Anglomanie」という言葉で代表されるほど、イギリス・モードに染まっていた。華美で洗練されたフランス服に、地味で素朴なイギリス服が取って代わり、19世紀のブルジョワ・モードへと続く「モードの簡素化」をもたらしたといわれている。

これまでの服飾史研究では、それまでイギリス風と呼ばれていた流行が、この時代にはむしろアメリカ風

と呼ばれるようになったという一言で片づけられており、この現象をアメリカ・モードとして注目した研究はない。ならばそれはどういう背景のもとに成立したのか、アメリカ・モードの経緯と詳細を示したい。

まずは、戦争に関わる名前を冠した女性の髪型に注目し、一連のモードを生み出した時代の趣味や背景を明らかにする。次に、C.H. ロッキットが指摘した、フランクリンやラ・ファイエットの「モードの簡素化」への影響について、さらにミシェル・パストゥローが指摘した、アメリカ起源の革命的縞モードについて、再検討する。

2. 戦勝を称える髪型

18世紀モードの大きな特徴は、服飾の各部分、とりわけ女性の髪型に、その時世間を賑わせたニュースが名前となってつけられ、モードが記念碑的役割を果

たしたことである*1。例えば、1778年の王妃の出産は王女風 à la Dauphine の髪型を生み出し、1783年の気球の発明はモンゴルフィエ風 à la Montgolfière モードを呼び、1784年の『フィガロの結婚』の大当たりはフィガロ風 à la Figaro ロープやシュザンヌ風 à la Suzanne ベストを流行らせた。とりわけ1777-79年にサロンでの話題をさらったアメリカ独立戦争もまた、貴婦人たちの頭の上を彩ることになる。

月桂樹の葉が戦勝を象徴した「勝利風 à la Victoire」の髪型、軍艦「バルブール号 la Belle Poule」や「ジュノン号 la Junon」を乗せた髪型が、1778年に発表された。さらには、海軍で活躍した英雄が「マリニ風 à la Marigny」の帽子、「ドルヴィリエ風 à la Dorvilliers」の帽子となって称えられ、アメリカの地名が「ヴァージニア風 à la Virginienne」の髪型、「ボストン風 à la Bostonienne」の衣装として取り入れられた。

こうしたモードは、単に戦況を知らせる以外に、複数の楽しみや役割を担って現れた。

数ある戦争ニュースの中で、最も好まれた題材は、デタン伯のグレナダ島奪還の活躍であった。この西インド諸島最南端の小島は、1650年にフランスが植民地とし、1762年にイギリスに奪われていたものだった。1779年、植民地奪還の喜びは、「デタン風 à la d'Estaing」あるいは「グレナダ風 à la Grenade」の髪型を生み出した。

「グレナダ grenade」という言葉には「ザクロの実」という意味があったことから、ザクロのモチーフが帽子やロープのデザインに効果的に利用された(図1*2)。さらに、ザクロの木を意味する「グルナディエ grenadier」という語が「男のような大女」をも意味したことから、メトラは、確かにこの巨大な帽子は大女の風格を醸し出すのに成功している、と感想をもらしている*3。名前を冠したモードのいくつかには、こうした言葉遊びの楽しみもあったに違いない。

図1のグレナダ風衣装では、さらに細部が戦況を象



図1. ザクロ・モチーフのグレナダ風モード

徴している。『ギャルリー・デ・モード』の解説によると、胸をあらわにしたデコルテは「グレナダを占領したフランス軍の勇気 la bravoure des troupes Françaises qui s'emparèrent de la Grenade」を表し、「絶望の首飾り collier en désespoir」はイギリス人の状態を表しているという*4。

同様に、イギリス人を皮肉った髪型が、バシヨモンによって伝えられている。それは、「蜂起する人々風 à l'Insurgente」の髪型で、「イギリスとアメリカとの対立の寓意」を乗せたものであった。この中でイギリスは邪悪なヘビで表された。それがあまりに精巧に作られたヘビだったので、人々にショックを与えるという理由から禁止されたという*5。戦争モードは、このように、時に風刺的役割をも果たした。

しかし、その最も重要な目的が、フランス軍の偉業を称えることであったことは間違いない。メトラは、

*1 以下の例は全て、18世紀末に刊行されたファッション・プレート『ギャルリー・デ・モード』による。

Gallerie des modes et costumes français, dessinés d'après nature, gravés par les plus célèbres artistes en ce genre, et colorés avec le plus grand soin par Madame Le Beau. Ouvrage commencé en 1778, chez Esnauts et Rapilly, Paris (1778-1787)

*2 *Gallerie des modes*, ff. 178, "Circassienne fond de couleur..." (1779)

*3 Métra, Louis-François: *Correspondance secrète, politique et littéraire, ou Mémoires pour servir à l'histoire des cours, des sociétés et de la littérature en France, depuis la mort de Louis XV*, 18 vol., J. Adamson, Londres, 8, 323-324 (25 sep. 1779) (1787-1790)

*4 *Gallerie des modes*, op. cit., description des habillements par Molé, 2, 40

フランス女性たちのグレナダ風帽子は、デタン伯に向けられた「詩や歌にも匹敵する尊敬のしるし Un hommage qui vaut bien une ode et des couplets」であり、モードは軍人たちの戦勝を聖別する、とその役割を支持している。さらに「それがどんなものであれ、善良な愛国者たちは、フランス女性たちがジャマイカ風のボネを被るのを見ることを熱望している」と締めくくっている*6。

つまり、髪型で戦勝を表現することは、推奨されるべき愛国的行為であり、頭上の装飾は、勝利の記念碑であるがゆえに、堂々と目立つものであることが必要であった。一連の髪型は、装飾の細部こそ異なるものの、建造物のごとく巨大に結び上げられたという点で共通していた。この身体にのしかかる重しにもまた、特別な意味が与えられた。

『カピネ・デ・モード』は、当時の髪型モードについて、フランスの栄光を「永久不滅なものとする ÉTERNISER dans la mémoire」行為であったと説明している。勝利のしるしを頭の上に乗せることで、その重みと共に、輝かしい記憶を身体の内深く、心の奥底まで刻みつけたのだという*7。

図2は、こうしたモードの役割を端的に表した風刺画であろう。「大きな疲労から多少回復した美女は、グレナダ風の巻き毛をひけらかし、かの有名な海員（デタン伯）を頭上に乗せ、彼の軍馬に休みを与えている。彼は、華々しい勝利と、その記念すべき武勲を称える民衆の歓声を味わっている」*8。

勝利の重みを身体で受けとめた女性にとっても、巨



図2. 婦人の頭に凱旋婦国

大なオブジェを眼前に突きつけられた男性にとっても、それは最も効果的に歴史を記憶にとどめる手段だったといえる。

また一方で、「アメリカ風 à l'américaine」と名前をつけた多くのモードが、何ら象徴となるモチーフも、オリジナリティももたなかったことをつけ加えておかなければならない。『ギャルリー・デ・モード』が紹介した「蜂起する人々風 à l'Insurgente」ローブも、「英米風 à l'Anglo-américaine」ローブも、その内容は常にシンプルなイギリス風ローブであった。男性の「クエーカー風 à la Quaker」帽子も、「英米風 à l'Anglo-américaine」帽子も、イギリスの「ジョッキー帽 Chapeau Jockey」と同色同形の帽子に過ぎなかった。

アメリカ独立戦争への熱狂は、一時的に戦勝の喜びを盛り上げる髪型を流行らせたものの、イギリス・モードに取って代わるような新しいモードを作り出すには至らなかった。その影響は、言葉のレベルにとどまっていたといわなければならない。

3. フランクリン：農民の衣装

C. H. ロッキットは、革命前の数年間に起こったモー

*5 Bachaumont, Louis Petit de: *Mémoires secrets pour servir à l'histoire de la république des lettres en France, depuis 1762 jusqu'à nos jours*, 36 vol., Gregg, Londres, 10, 299-300 (4 déc. 1777) (1970)

*6 Métra: *op. cit.*, 8, 323-324 (25 sep. 1779) "Quoi qu'il en soit, les bons patriotes souhaitent ardemment de voir à nos femmes, des bonnets à la Jamaïque."

*7 *Cabinet des modes, ou les modes nouvelles, décrites d'une manière claire et précise, et représentées par des planches en taille-douce, enluminées*, chez Buisson, Paris, 22ème cahier, 169 (1^{er} oct. 1786) (1785-1786)

*8 "La Nimphe un peu remise de ses grandes fatigues laisse reposer son Coursier s'étant parée d'une Frisure à la Grenade sur laquelle elle porte son fameux marin au milieu de ses Triomphe, et aux Acclamations du peuple qui s'empresse de Couronner ses Mémorables exploits." Bibliothèque Nationale de France, Cabinet des Estampes, Collection Hennin, t. 112, G161038 (1779)

ドの大変化、つまり人々が髪粉や装飾や剣を放棄し、粗末な衣服にごつごつした杖を持つようになった理由のひとつを、アメリカ大使フランクリンの影響によると指摘している*⁹。このフランクリン・モードとは、一体どのようなものであったのだろうか。

後にアメリカ建国の祖として知られることになるベンジャミン・フランクリン Benjamin Franklin (1706-1790) が、蜂起した仲間たちへの支援を求めてフランスに上陸したのは、1776 年末、彼が 70 歳の時であった。政治家、著述家、そして化学者としての彼の才能はすでに有名であり、フランクリンはパリ人たちから熱烈な歓迎を受けた。

彼は、熱狂的信者たちに走って追いかけられ、称賛の言葉を浴びせかけられ、拍手喝采で迎えられた*¹⁰。あらゆるサイズ、形の彼の肖像が回回り、それはヴェルサイユ宮殿の国王の眼前でさえ売られたという*¹¹。バショームンは、「今日のモードは、暖炉の上にフランクリン氏の版画を飾ることである」と記しており、高名な肖像画家グルーズがフランクリンの肖像画に着手していることや、肖像画の完成を待ちわびて壁に窪みを用意している人物のことを伝えている*¹²。これらの肖像には、彼の偉大さを象徴する銘が入れられた。それは、ある時には「地球の裏側からの復讐者、我らの光 Alterius orbis Vindex, utriusque Lumen」と付けられ、またある時には「空から雷を奪い、暴君から王杖を奪う者 Eripuit fulmen coelo sceptrumque tyrannis」と刻み込まれた。後者はテュルゴによる文で、フランクリンの避雷針の発明を称えつつ、暴君イギリスからの独立を謳った内容が好まれた。

では、こうした人気の上に、彼の服装はどう受けとられたのだろうか。カンパン夫人は、それを「アメリカの耕作人の衣装 costume d'un cultivateur

américain」であったと形容している。彼の茶褐色の毛織物の衣服、巻き毛も作らず粉も振らないその髪と、フランス宮廷人たちの、スパンコールや刺繍のちりばめられた衣服、洗練された髪型が、あまりに対照的であったことを伝え、彼の簡素な身なりが、フランス女性の心を打ったと解説している*¹³。

デュ・デファン侯爵夫人は、フランクリンの衣装をつぶさに観察し、その特異な部分に「自由のしるし」を見いだしたがっている。彼の赤褐色のピロードのアビ、白い靴下、べたんと伸びた髪、鼻眼鏡、そして腕の下に抱えた白い帽子に注目し、「この白い帽子は自由の象徴であろうか？」と述べている*¹⁴。

さらにセギュール伯は、「驚くべき対比」を雄弁に語っている。パリの豪華、フランス・モードの優雅、ヴェルサイユの贅沢、ルイ 14 世の威光の痕跡、大貴族たちの洗練された気高さに対比するものとして、フランクリンの素朴な衣装、気取りのない堂々とした態度、自由で率直な物言い、糊づけも粉も省いた髪、そして時代錯誤の雰囲気と並べ、まるで 18 世紀の軽薄で退廃した文明のただ中に、古代ローマの賢人、共和主義者が舞い降りたかのようなのだと記している*¹⁵。

フランクリンの質素な身なりは、フランス宮廷人の目に新鮮であり、彼の徳を反映するものとして、またアメリカ人の「自由を渴望する共和主義者」というイメージと結びつけて考えられた。

フランクリンに付き従った軍服姿のアメリカ人たちもまた、熱烈に歓迎を受けたが、それに対して、流行の身なりをしたフランクリンの孫たちは、フランス人たちの輦轡を買った。バショームンは、彼らがこれ見よがしに身につけている「赤い踵」について、「それはヴェルサイユの宮廷にあっては許される下らない飾りであるが、フィラデルフィアの連邦議会の一代表者の子孫には、ふさわしくない」と批判している*¹⁶。

つまり、フランス人の先入観からすると、暴君に虐

*⁹ Lockitt, C. H.: *The Relations of French and English Society (1763-1793)*, Longmans, Green and Co., London, 40 (1920)

*¹⁰ *Correspondance secrète inédite sur Louis XVI, Marie-Antoinette, la cour et la ville de 1777 à 1792 publiée d'après les manuscrits de la Bibliothèque Impériale de Saint-Petersbourg*, 2 vol., Plon, Paris, 1, 13 (24 jan. 1777), 185 (2 juillet 1778) (1866)

*¹¹ Campan, madame: *Mémoires de Madame Campan, première femme de chambre de Marie-Antoinette*, Mercure de France, 194 (1988)

*¹² Bachaumont: *op. cit.*, 10, 17 (17 jan. 1777) "La mode est aujourd'hui d'avoir une gravure de M. Franklin sur sa cheminée." 214 (30 juin 1777), 238 (24 juillet 1777)

*¹³ Campan: *op. cit.*, 193

*¹⁴ Du Deffand, Marie: *Lettres de la marquise du Deffand à Horace Walpole, écrites dans les années 1766 à 1780*, 2 vol., nouvelle édition, Librairie de Firmin Didot Frères, Fils et C^{ie}, Paris, 2, 316 (22 mars 1778) (1864) "Le Franklin avait un habit de velours mordoré, des bas blancs, ses cheveux étalés, ses lunettes sur le nez et un chapeau blanc sous le bras. Ce chapeau blanc est-il un symbole de la liberté?"

*¹⁵ Ségur, Louis-Philippe comte de: *Souvenirs & Anecdotes sur le règne de Louis XVI*, Fayard, Paris, 67 (s.d. vers 1910)

げられた「蜂起する人々」は、なんと少しでも粗末な身なりをしていなければならなかった。服装の簡素さは、隷属するアメリカの状況と自由を求める真面目な意思との表れと受けとられた。

フランクリン自身は、自らの服装がパリで最も質素であることに誇りをもち、パリ人たちが彼を模倣することを望んでいる。彼は、友人にあてた手紙の中で「私はぜひともフランスの紳士淑女が全員、私のモードを採用してくれることを願っている。その巻き毛をほどこし、私と同じ髪型にするのだ。」と書いている^{*17}。

しかし、彼の服装に感銘を受けたのは、カンパン夫人がいうように、主に女性であった。その『回想録』には、フランス婦人たちがフランクリンのために催した祝宴の様子が記されている。「300人の女性の中から、最も美しい人が指名され、このアメリカ人哲学者の白髪の上に月桂樹の冠を置き、この老人の両頬にキスを贈ったのです^{*18}。確かに彼は「自由の使徒」として崇め奉られたが、その外観は70歳の「老人」であった。彼女たちが身につけたフランクリン風のボネやローブが、農民のような老人の外観とどれほど関係があったかは疑問である。

同様に図3^{*19}は、フランス宮廷におけるフランクリンの特異性を思わせるものである。その服装は、彼が彼であることの証明であり、必ずしも模倣すべき対象ではなかったのではないだろうか。

確かに人々は「蜂起する人々」の勇気を称えたが、だからといって、イギリスの奴隷であるアメリカ人になりたいとは思わなかった。フランクリンの服装に最も特徴的であった、毛皮のボネも鼻眼鏡も採用されな

^{*16} Bachaumont: *op. cit.*, 11, 121 (25 fév. 1778) "Ils ont arboré les talons rouges; décoration frivole, bonne à la cour de Versailles, mais indigne des descendants d'un des chefs du Congrès de Philadelphie."

^{*17} Franklin, Benjamin: *Correspondance*, 3 vol., trad. et annot. par E. Laboulaye, Hachette, Paris, 2, 141 (1870) "Je voudrais, pour beaucoup, que toutes les belles dames et tous les gentilshommes de France eussent la bonté d'adopter ma mode, de se coiffer comme je le fais, de congédier leurs friseurs."

^{*18} Campan: *op. cit.*, 193-194, "la plus belle, parmi trois cents femmes, fut désignée pour aller poser sur la blanche chevelure du philosophe américain une couronne de laurier, et deux baisers aux joues de ce vieillard."

^{*19} Geller William Overend: *Benjamin Franklin à la cour de France*, musée national de la Coopération franco-américaine, Blérancourt (19^e siècle)

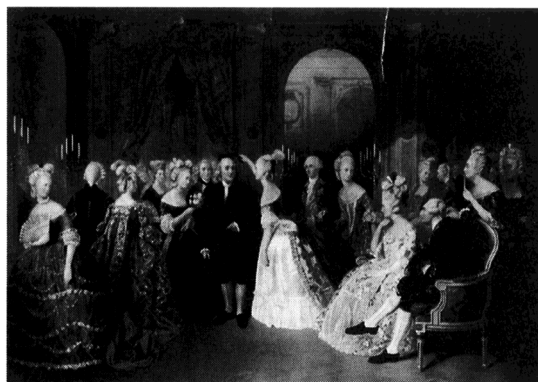


図3. フランス宮廷におけるフランクリン

かったことを考えると、彼を真似るために剣や髪粉を放棄したとは考えにくい。

フランクリンの人気が直接モードに影響を与えたとは断定できないが、簡素な外観と「自由」という肯定的イメージとの結びつきを強めたとはいえるだろう。

4. ラ・ファイエット：軍人モード

C. H. ロッキットが指摘する、「モードの簡素化」のもうひとつの原因とは、アメリカ独立戦争に従軍したフランス人将校たちの影響である。彼は、ラ・ファイエットの『回想録』を引用しながら、フランス兵士たちがアメリカ人の慎ましさに感動し、影響を受けたと説明している^{*20}。

青年期の8年間に3度アメリカへ遠征したラ・ファイエット La Fayette (1757-1834) は、新大陸での生活をこら綴っている。「衣服、食事、習慣、全てがアメリカ風だった。彼は他の誰よりも簡素で、慎ましく、厳格でいることを望んだ^{*21}。さらにランゲが伝えるところによると、ラ・ファイエットは戦いを終えて街に戻ると、軍服もコルドン・ブルーも高貴なフランス風衣装も捨て、茶褐色の簡素な衣服を着て、仲間たちと共に自由への賛歌を歌いながら酔っぱらったという^{*22}。

しかし、これらの記述だけでは、ロッキットの言を

^{*20} Lockitt: *op. cit.*, 40-41

^{*21} *Mémoires, Correspondance et Manuscrits du général La Fayette publiés par sa famille*, 6 vol., Fournier, Paris, 1, 37 (1837-1838) "son costume, sa table, ses mœurs, tout était américain. Il voulut être plus simple, plus frugal, plus austère qu'aucun autre." 3人称で書かれてはいるが、紛れもなく本人の手によると編集者は注記している。

認めるのに十分ではない。彼の服装が、どのようにパリのモードに影響を与えたのかを確かめる必要がある。

植民地の蜂起に感銘を受けた若きラ・ファイエットは、家族にも宮廷にも一言も告げずに、1777年6月、単身大洋を渡った。1779年2月にパリに戻った時、彼は英雄になっていた。王妃は彼に複数の謁見を許した。フランス座では、ベロイの悲劇『ガストンとバイヤール』(1771)の詩が、偶然にも彼の若さと武勇に向けられたかのようだと、もてはやされ、再演された*23。

ああ！彼の若さが何をなしたか。
 彼が賢く見えるのは、私が老人だからか？
 冷静に描いた計画の奥底には
 それを遂行するための情熱がたぎっている。
 野営地を守ることも、城壁を打ち破ることもできる。
 若い兵士のように戦闘を愛し
 老将のように戦いを避ける術を知っている。
 私は喜んで彼に従う。模倣さえしよう。
 彼の思慮深さを称え、彼の勇気を愛する。
 これらふたつの徳をもってして
 軍人は年をとらない。

またランゲは、ラ・ファイエットのアメリカでの活躍を、まるで小説のようであると語り、その雄姿を古代の英雄に比肩するものとして称えている。さらに人々が、無口な彼を見て「フィラデルフィア人のような慎重深さ fort discret, et grave comme un Philadelphien」を感じていたことを伝えている*24。

ラ・ファイエットに続いてアメリカの戦争に参加した軍人たちも同様に、英雄として扱われた。彼らはパ

リに戻ってくると、口々に連邦議会や蜂起する人々を称え、ワシントン将軍とお揃いのキンキナトゥス勲章を見せびらかして歩いた。セギュール伯は、「そのような共和制の勲章 telle décoration si républicaine」が「偉大なる君主制国家の首都の真ん中で au milieu de la capitale d'une grande monarchie」戦争の名誉として誇らしげに輝いていることに嫌悪感を表している*25。

アメリカ帰りの兵士たちは、「暴君から奴隷を解放する勇者」として、称賛の目を向けられたのであり、軍服は、そのイメージにふさわしい「戦う者」の制服であった。たとえ彼らが、アメリカ人の簡素さに感銘を受け、海の方こうで農民のように装っていたとしても、フランスに凱旋帰国した後もずっと、アメリカのブルジョワ服を採用し続けたとは考え難い。ラ・ファイエットがもたらしたものは、すなわち「軍人モード」であった。

こうした好戦的雰囲気が残る中で、1783年の王太子の誕生は「マルボロー風 à la Marlborough」モードを流行させた。乳母が子守歌として「マルボローは戦争へ行つた Marlborough s'en va-t-en guerre」を歌ったことに由来する。今日でも子どもの愛唱歌として有名なこの歌の内容は、17世紀に実在したイギリス将軍、マルバラ公爵 John Churchill Duke of Marlborough (1650-1722)の戦死を題材としており、まるで子守歌に似つかわしくない。戦争に行った恋人の帰りを待ちわびた姫君は、高い塔の天辺に上って、想い人の姿を探そうと目をこらす。そこへ黒装束をまとった小姓が現れ、マルボローは戦死しました、あなたもピンクのサテンのドレスから喪服に着替えてください、と告げる。マリー・アントワネットは、彼女の私的庭園プチ・トリアノンの村落に、「マルボローの塔」なるものまで造らせており、そこでこの歌の女主人公を気取っていた様子が想像できる。王妃の愛人として知られるスウェーデン大使フェルセン伯も、アメリカ独立戦争に従軍している。子守歌の内容は、アメリカの戦争に恋人を送り出した女性たちの心情にも重なるものであり、自らを歴史物語の主人公になぞらえる英雄モードの中で好まれたともいえるだろう。この時、軍人という存在は、最も注目を集めた流行の対象であったといえる。

軍服の画一性、普遍性は、変化を常とするモードと

*22 Linguet, Simon: *Annales politiques, civiles et littéraires du dix-huitième siècle*, 9 vol., Société Typographique, Lausanne, 5, 226 (1778-1780)

*23 Campan: *op. cit.*, 195 "Eh! que fait sa jeunesse, / Lorsque de l'âge mûr je lui vois la sagesse? / Profond dans ses desseins qu'il trace avec froideur, / C'est pour les accomplir qu'il garde son ardeur. / Il sait défendre un camp et forcer des murailles, / Comme un jeune soldat il aime les batailles; / Comme un vieux général il sait les éviter. / Je me plais à le suivre et même à l'imiter. / J'admire sa prudence et j'aime son courage; / Avec ces deux vertus un guerrier n'a point d'âge."

*24 Linguet: *op. cit.*, 4, 346, 5, 223, 225

*25 Ségur: *op. cit.*, 128

対立するために、「簡素な衣服」と見なされたが^{*26}、また一方で、それはブルジョワの衣服とも対立する「高貴な衣服」であった^{*27}。モード誌が本格的に軍服の流行を告げるのは、10年後の1789年であるが^{*28}、それはある日突然現れた流行ではなく、ラ・ファイエットを初めとするアメリカ帰りの軍人たちによって、すでにその芽が準備されていたといえる。

5. 縞の流行

フランス・モードにおけるアメリカの影響を主張したもう一人の研究者がミシェル・パストゥローである。彼は、18世紀末の縞モードは、アメリカの星条旗に由来すると指摘している。ヨーロッパ文明において、中世以来「負」の価値を背負われてきた縞柄が、アメリカの独立によって、「自由」の象徴という「正」の価値を取り戻し、フランス革命において政治的イデオロギーを表明するものとして多用されたという説明である。縞を着ることは、革命の支持者であることを意味し、多くの革命家たちは、全ての市民が唯一縞の衣装を着ることを望んだという^{*29}。

確かに、フランス革命においては、おびただしい縞の図を目にする。トリコロールの配色は、アメリカの赤と白の縞からそう遠くない。革命における縞の共和主義的イデオロギーは、独立を勝ち取った新世界に由来するという説明にも納得がいく。

しかし、パストゥローは、貴族の縞モードが、革命の縞とは別の流れで存在したことを、もっと強調すべきである。18世紀の早い時期からすでに縞の流行があったことは、カルモンテルが描いた肖像の多くに縞のローブが見られることから明らかである(図4^{*30})。そして、これら貴族の縞が、アメリカとは無関係であっ



図4. 貴族の縞モード

たことを思わせる根拠がいくつも存在する。

例えばメルシエは、1788年、縞モードの起源を国王のベットのシマウマだと説明している。「王の小部屋のシマウマが、現在のモードのモデルになった。あらゆる布が縞柄である。アビもジレも美しいペルシアロバの皮のようである。男性は、老いも若きも、頭の上からつま先まで縞できめている。靴下だって縞だ」^{*31}。

1786年11月から1789年12月まで、その出版期間中を通して、縞モードを紹介し続けた『マガザン・デ・モード』は、縞モードがこれほど長く続いたその理由を「無限のバリエーション extrême variété」にあると説明している。縞の太さや色の濃淡、配色、数を変えながら、あらゆる種類の布地とあらゆる季節の衣服を支配し続けたという^{*32}。

1789年9月、『マガザン・デ・モード』の編集者は、

^{*31} Mercier, Louis-Sébastien: *Tableau de Paris*, 2 vol., Mercure de France, 2, 908 (1994) "Le zèbre du cabinet du roi, est devenu le modèle de la mode actuelle; toutes les étoffes sont rayées; les habits, les gilets, semblent à la peau du bel onagre. Les hommes, jeunes et vieux, sont en rayures des pieds à la tête: les bas sont aussi rayés."

^{*26} *Magasin des modes nouvelles françaises et anglaises*, chez Buisson, Paris, 28ème cahier, 217 (11 sep. 1789) (1786-1789)

^{*27} Caillot, Antoine: *Mémoires pour servir à l'histoire des mœurs et usages des Français*, 2 vol., Dauvin, Paris, 2, 112 (1826)

^{*28} *Magasin des modes*, op. cit., 28ème cahier, 217 (11 sep. 1789), 30ème cahier, 235 (1 oct. 1789)

^{*29} Pastoureau, Michel: *Rayures: une histoire des rayures et des tissus rayés*, Seuil, Paris, 62, 71 (1995); ミシェル・パストゥロー: 『悪魔の布』(松村 剛, 松村恵理訳), 白水社, 64, 70 (1993)

^{*30} Carmontelle: *Mme. de Meaux, sa fille et M. de Saint-Quentin, répétant une scène musicale*, musée Condé, Chantilly (18^e siècle)

結果的には外れることになる「縞モードの終焉」を予告している。その根拠となったのは、最も細い縞から最も太い縞へと発展を遂げてしまったため、もうこれ以上の成長は見込めまいと判断したからである^{*33}。革命のただ中で、もし人々がこれらの縞に政治的主張を感じ取っていたならば、編集者は、バリエーションの限界などという理由で、縞柄の消滅など予測しなかったはずである。

1789年6月に赤と白の縞が流行したとき、この色の組み合わせはアメリカの縞を思い起こさせるものではなかった。『マガザン・デ・モード』は、その美しさを氷とバラの色にたとえている^{*34}。

確かに1779年に紹介された複数の「アメリカ風」モードには、縞模様が効果的に使われており、新大陸と縞との結びつきを思わせる。しかし、こうした縞模様は、トルコ風や中国風など、異国趣味を表す時の使われ方にも通じるものであり、アメリカに限ったモチーフではない。

パストゥローは、縞の流行に関して、アメリカに起源があることは間違いないと断言しているが、少なくとも革命前の貴族の縞モードに関しては、その根拠を疑わざるを得ない。

6. 結 論

アメリカ植民地の蜂起は、一時的にアングロマニーを押しつける勢いで、フランス人の頭を熱したにもかかわらず、アメリカ・モードと呼べるような形は何も残さなかった。

アメリカ・モードのオリジナリティーの欠如は、イギリス・モードとの類似性に起因するだろう。植民地

のモードは本国のモードに倣う。アメリカ植民地は政治的にはイギリスに対立していたが、文化的には変わらずその本国とつながっていた。ラ・トゥール・デュ・パン侯爵夫人は、裕福なアメリカ人たちが、独立後もずっと彼らのイギリス風の習慣を守り通しながら、イギリスを懐かしんでいたことを回想している^{*35}。

また、18世紀末には、フランス・モードとイギリス・モードとは、すでに区別がつかないほど近づき、パリのモード誌は、遠くボストンにまで及んでいた^{*36}。アメリカ人の服装は、イギリス服と同様に、パリ・モードに遅れて追従する地方の田舎者の衣服に過ぎなかった。

フランス人にとって、英米両国は、地味でシンプルな外観と、自由の国というイメージを共有していた。ガラの『回想録』には、イギリスに対するあこがれに勝るとも劣らない、遠い海の向こうの理想郷が描かれている。「我が国の奢侈の威光と技術の驚異にもかかわらず、あらゆる人々の視線と心は、興奮とともに大洋を横切り、新世界という著しくさびしい場所へと注がれていた。そこでは、自由と哲学と自然が全ての人間に幸福を保証していた。その幸福とは、才能や身分や財産という避けがたい不平等のただ中であっても、皆が平等でいられるというものである」^{*37}。アメリカ帰りの軍人たちは、まるで自由の伝道師であるかのように、新大陸の幸福な未開人たちについて語ったことだろう。

アメリカ熱は、モードに新しい形こそもたらさなかったものの、控えめな装いの中に自由のしるしを刻みつけることに貢献した。

^{*35} la Tour du Pin, marquise de: *Journal d'une femme de cinquante ans, 1778-1815*, 2 vol., Librairie Chapelot, Paris, 2, 7 (1913)

^{*36} *Magasin des modes*, op. cit., 22ème cahier, 172 (20 juin 1788)

^{*37} Garat, Dominique-Joseph: *Mémoires historiques sur la vie de M. Suard, sur ses écrits, et sur le XVIII^e siècle*, 2 vol., A. Belin, Paris, 2, 319 (1820) "Au milieu des prestiges de notre luxe et des prodiges de nos arts, tous les regards et tous les cours se portaient avec émotion, à travers l'Océan, sur ces immenses solitudes du Nouveau-Monde, où la liberté, la philosophie et la nature promettaient à tous les hommes un bonheur qui pouvait être égal pour tous au milieu même des inégalités inévitables des talents, des conditions et des fortunes."

^{*32} *Magasin des modes*, op. cit., 6ème cahier, 41 (10 jan. 1788)

^{*33} *ibid.*, 32ème cahier, 252 (30 sep. 1787)

^{*34} *ibid.*, 19ème cahier, 147 (1 juin 1789)